

# 郷土博物館・文学館だより

## 第12回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

12回目を迎えた平成24年度は、52名から200首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作5首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示されました。

5月9日には当館で表彰式が行われました。表彰者の中には、当館主催の文学講座「短歌をつくろう」で経験を積んで挑戦した結果、

受賞に至った方もいらっしゃいました。

平成24年度も10月から短歌の実作を中心とした講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第13回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰後の記念写真

第十二回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

〔優秀作〕

ここですか「春の小川」と詠まれしは

ビルの谷間の暗渠となりて (大熊 順三)

ベレー帽被っていくわと言う友を

ハチ公前で見つけるたのしみ (上山 公子)

五条橋と橋の名のこしこの道が

川でありし日遠くなりたり (鈴木 トヨ)

文明の脆きを照らす望の月

原発事故に街も黙する (福永 晴美)

三世代通った幡代小学校

春には四代目入学します (森田 真理子)

〔佳作〕

朝焼けにターナーの空広がりぬ

渋谷西原木々シルエット (功刀 園子)

スクランブル言いそびれたる「こめんね」が

点滅してる渋谷たそがれ (小林 晶美)

母慕う若き晶子を碑に見つけ

道玄坂上しばし立たずむ (本田 道子)

名人戦将棋の場所と親しみし

羽沢ガーデンついに消え行く (前田 忠男)

渋谷なる区役所裏にひっそりと

あの二・二六の歴史は眠る (横山 アエ)

## 同潤会代官山アパート —最新の設備をもつ夢の住まい—

昨年3月11日に発生した地震は東日本を襲い、未曾有の被害をもたらしました。この地震からおよそ90年前の大正12年(1923)9月1日、首都圏に壊滅的な被害を与えた地震が、関東大震災です。家を失った人は150万人以上、死者は10万人近くにのぼりました。

こうした人の救済のため、大正13年5月「同潤会」が財団法人として設立されました。「同潤会」は当初東京・横浜に木造仮設住宅を2,160戸供給し、さらに3,000戸以上の賃貸普通住宅を建設しました。

住宅供給に一応の目処がついたことから、大正14年(1925)より、「同潤会」は鉄筋コンクリート製のアパート建設に着手しました。これは、下町などの不良住宅改良を目的に近代的で衛生的な住宅を供給する一方、渋谷・新宿などでは、中流のインテリ層に近代的で実用的な最新の住宅を供給することを目的にしたものでした。

渋谷には、青山と代官山の2ヶ所に建設されました。昭和2年(1927)に建設された「代官山アパート」の大きな特徴の一つは、丘状の傾斜地をうまく利用した建物の配置にあります。南斜面には4世帯が入居できる2階建て住宅を等高線に合わせるように4段に配置しています。北東面は、急斜面を造成し、敷地を最大限に利用するように、3階建ての单身用住宅を建て、渡り廊下で連絡しながら、巧みに配置しています。

また、アパート内には様々な共用施設が設けられ、広場を中心に食堂、商店、理髪店、娯楽室、共同浴場などが設置されました。

住宅の床は、一見すると畳に見えますが、コルクの板の上に畳表を2枚敷いたものでした。これは、畳として和風住宅として使用する一方で、洋風の生活に欠かせないイスやテーブルを設置しても畳が傷まないという配慮でした。

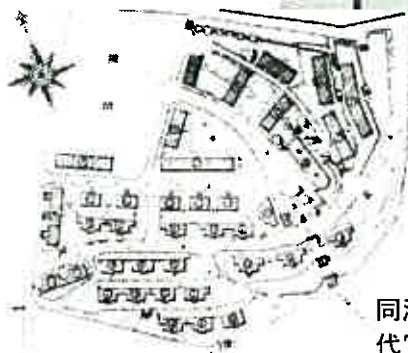
また、台所には流し台、ガス台はもちろん、調理台、ダストシュートが設置されていました。その他、トイレのシンクの上には鏡付きの化粧ボックスがあり、玄関には帽子掛け、下駄箱、傘立て、表札まで完備されていました。

住宅の中には、7畳半に1畳ほどの作り付けのベッド、半畳の玄関を設けた单身者用の住宅もありました。床はコルクと畳表で、部屋ごとにコンパクトなガス台が設けられ、お湯などを沸かすことができるようになっていました。ほかにも、部屋の各所に収納が設けられるなど、住みやすさへの細かな工夫が見られます。

当時、最新の設備をもつこのアパートの人気は高く、家賃は木造貸家のおよそ5割増しであったにも関わらず、応募者が絶えなかったといえます。



同潤会  
代官山アパート  
单身者用室内



同潤会  
代官山アパート配置図



## 渋谷の女流歌人・杉浦<sup>すいこ</sup>翠子

渋谷に住んだ女流歌人として、与謝野晶子が知られていますが、大正から昭和にかけての歌人として忘れてはならないのが杉浦翠子です。

翠子は本名を翠（みどり）といい、明治18年（1885）、現在の埼玉県川越市に生まれました。福沢諭吉の娘婿になった福沢桃介は翠子の兄になります。幼くして両親を失った翠子は、祖母のもとで育てられたあと、姉の嫁ぎ先である出淵豊保の家に身を寄せます。そこで出淵と同郷であった若き画家、杉浦非水と知り合うことになり、37年、二人は結婚しました。非水が三越の図案部の嘱託となった41年、当時の千駄ヶ谷町穂田（現在の神宮前五丁目付近）に居を構え、以後、二人は渋谷付近を転々としします。

そして渋谷町伊達（現在の恵比寿三丁目付近）に移ったあとの大正4年（1915）、非水の友人であった北原白秋の弟を介して、翠子は白秋に師事することになり、歌の道に邁進します。その翌年にはアララギに入会し、斎藤茂吉について歌を学び、6年には最初の歌集『寒紅集』を刊行しました。

ところがその後、翠子は、当時のアララギ主流派であった島木赤彦の門下と対立することになります。『アララギ』誌上では、翠子の歌を藤沢古美が「全然歌になってみない」「作者自身の作家態度を深く反みる必要がある」などと激しくののしりました。こうして翠子は、12年、アララギから離れることになります。折しも、夫の非水は前年から渡欧していました。

当時、翠子は「渋谷の大火」という歌を4首詠んでいます。

人の家を火に焼く空のあかあかし

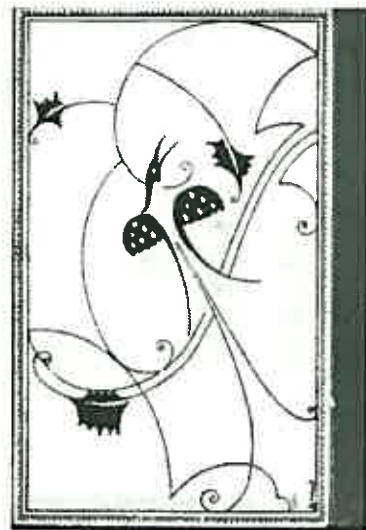
我れいつまでか留守まもるらむ

おだやかならぬ身辺の中、近くの火事に、一人で不安な夜を過ごす翠子の心中は、どのようなものだったのでしょうか。

アララギを去った翠子は、作歌の場を白秋系の『香蘭』に移し、昭和8年（1933）には、自ら『短歌至上主義』を創刊しました。また、12年にはすでにデザイナーとして著名であった非水との合作展を高島屋で開きます。しかし、戦争が激しくなると、『短歌至上主義』も終刊となるなど、活動の幅は狭まります。

終戦後の21年、翠子はザラ紙の謄写印刷で『日の黒点』という歌集を出版しました。そこには戦争に敗れたあとの代々木練兵場付近を詠んだ「代々木野」

が収められています。翌22年には『短歌至上』という名で歌誌も復刊します。その後も翠子は旺盛な創作活動を続けましたが、35年2月16日、伊達の自宅にて75年の生涯を閉じました。



小説『愛しき歌人のむれ』  
昭和37年刊、装幀は非水



## 文化財紹介

区指定有形文化財(非公開)

### 「壽稻荷本殿 附 石造手水鉢

(明和8年在銘)」

一棟(江戸時代)

(平成22年度指定)所在地 日本薬学会



(壽稻荷本殿)

壽稻荷本殿は、江戸時代に信州高島藩諏訪氏下屋敷(現日本薬学会付近)に勧請されたと考えられます。明治時代になると諏訪氏の屋敷地は、医師の長井琳草が購入します。以来壽稻荷は、長井氏の所有となりますが、昭和37年に長井氏の子孫によって、壽稻荷を含む土地は日本薬学会に寄贈されました。

本建築は、小規模ながらも随所に精巧な彩色が施されているのが特徴です。その彩色表現は、建立当初のものと後世のものに分けられます。当初の彩色を留めるのは柱、板壁、虹梁(こうりょう)、化粧棟木(けしょうむなぎ)などです。黒漆を下地とし、その上に彩色は施されています。

柱は金泥(きんない)の彩色で、板壁の外表面には牡丹、麒麟、獅子が、また唐破風の琵琶板には鳳凰が描かれています。建物内部の壁面に

は金箔がおされ、正面扉の内側には隨身(すいじん)が描かれます。虹梁と棟木の彩色は特に精巧で、部材全体に文様が施されます。これら当初の彩色に比べて、後世のものは技法が低く、題材も大きく異なります。また組物には、接合部などで色が塗られていない部分もあり、部材を組んでから筆を入れたと推察できます。

特に、当初の彩色を留める柱などに、徳川家の家紋である三葉葵がみられることは重要です。高島藩4代目藩主・諏訪忠虎の正室が越前松平昌勝の娘であり、親藩・越前松平氏ゆかりの建築が移された可能性もあります。

本建築は、小規模ではありませんが、密度も高く装飾が施され、かつ三葉葵を有する建築として希少であり、極めて高い価値を有します。

### 【開催中の展示】

企画展「写真展 渋谷区ができたころ」北部編

平成24年9月17日(月・祝)まで

### 【今後の展示予定】

企画展「『流行歌』を創った人たち

—渋谷ゆかりの作曲家—(仮称)

平成24年9月22日(土)～11月25日(日)

\*昭和初期に「流行歌」を創った作曲家と当時の世相を紹介します。

企画展「独歩・花袋・国男 丘の上の青春」(仮称)

平成24年12月8日(土)～平成25年3月24日(日)

### 白根記念

## 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00 (入館は16:30まで)

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を13:00から変更しています。詳細については、お問合せください。

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※18歳以上20歳未満の方は無料  
※65歳以上の高齢者の方は別途割引あり

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目19-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.20

平成24年8月1日発行